

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## A Semantic Analysis of Adverbs and Adverbial Expressions of Unintentionality : "Ukkari(to)", "Ukauka(to)", "Ukatsuni", and "Ukatsunimo"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 澤熊, LEE, Tack ung メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002095">https://doi.org/10.15084/00002095</a>

# 非意図的であることを表す副詞 (的機能を持つ表現) の意味分析

—うっかり(と), うかうか(と), うかつに, うかつにも—

李 澤 熊

(名古屋大学大学院)

## キーワード

非意図的, 類義語, 多義語, 拡張, スキーマ

## 要 旨

本稿は, 非意図的であることを表す副詞 (的機能を持つ表現) 「うっかり (と), うかうか (と), うかつに, うかつにも」の4語の個別の意味とその類似点・相違点を明らかにすることを目指したものである。分析の結果を簡単にまとめると以下のようになる。

まず, 「うかうか (と)」は<相手に対する注意力の欠如>の場合に用いられるが, 「うっかり (と)」は単なる<自分自身の注意力の欠如>の場合に用いられる。次に, 「うっかり (と)」は<注意力の欠如が原因となってその結果行う行為を表す>場合に用いられるのに対して, 「うかつに」は<行為の仕方に注目し, その様子に注意深いところがない, 気をつけるところがないことを表す>場合に用いられる。さらに, 「うっかり (と)」は, 単に<注意力の欠如が原因となって行う行為を表す>場合に用いられるのに対して, 「うかつにも」は, 話し手が<自分とかわるある事柄について十分な注意をはらわなかった>結果に対する<反省の意を表す>場合に用いられることから, すでに起きた事柄についてしか用いられない。

## 1. はじめに

### 1.1. 研究の対象

本稿は, 現代日本語の副詞 (的機能を持つ表現)<sup>1</sup> 「うっかり (と), うかうか (と), うかつに, うかつにも」の4語を考察対象とする<sup>2</sup>。これらの4語は共通して「非意図的であることを表す」という意味を持っている。それを示す一つの言語事実として, これらの語は, 下の例 (1) のような「てみる」を含む文に現れないということがある。

(1) \*太郎に昨日のデートのことを (うっかり (と), うかうか (と), うかつに, うかつにも) 聞いてみた。

これについて少し補足すると, 田中(1999)は, 下の例 (2) をあげて, いわゆる派生動詞「てみる」について, 明らかに意味の異なる2つの用法があると指摘している。

(2) a ゴミ置き場のドアを内側から開けて, 駐車場ののぞいてみた。(…) 引き返して, 今度は非常階段を一階から五階までのぼってみた。やっぱり誰もいない。

b 授業が始まってみると, 疑心暗鬼で心配したような難しいことはやらされなかった。

(田中(1999:87))

最初の例では、「てみる」は、行為をした結果明らかになるはずの何かを確かめようという積極的な態度を伝えるが、後の例の「てみる」からは、そうした積極的な態度は伝わらない。

(田中(1999:87))

例(1)における「てみる」は、前者、つまり「行為をした結果明らかになるはずの何かを確かめようという積極的な態度を伝える」という意味で用いられると考えられる。この「てみる」と、上にあげた4語に共通する「非意図的であることを表す」という意味が衝突するのである。

また、「非意図的であることを表す」という共通点のほかに、これらの4語は「話し手が主体の行為や状態に対して、マイナス評価をあたえることを表す」という共通点をも持っている(詳しくは後述)。

これらの4語の意味を分析した先行研究としては、国広他(1982)、藤原他(1985)、飛田他(1994)、芳賀他(1996)、酒井(1998)がある。それぞれの記述には参考にすべき点も多いが、いずれも各語の個別の意味とその類似点・相違点の記述が十分とは言えない(詳しくは後述)。

本稿の目的は以上の先行研究を踏まえ、「うっかり(と)、うかうか(と)、うかつに、うかつにも」の4語の個別の意味とその類似点・相違点を明らかにすることである。

ここで、今後本稿で用いる用語について確認しておく。

本稿における「意図」とは「何らかの目的を持ってある事柄を実現しようとする」とを指し、その対立概念を「非意図」とする。また、「注意」とは「ある事柄に対して好ましくない結果にならないように努めたり、念を入れたりすること」を指すものとする。

## 1.2. 本研究の意義

日本語において副詞は複雑な性格を持ち、他の品詞に比べて、まだ研究の余地があるように思われる。また、どの品詞にも入らないものを集めたのが副詞であるとする考え方もあり、副詞は「ごみばこ」(野田(1991:29))、「品詞論のはきだめ」(渡辺(1983:5))などとも言われている。李(2000)では、このような現状を踏まえて副詞の定義や分類を行った。また、副詞研究のケーススタディーとして、上に上げた4語を含む主体の意図に関わる副詞(的機能を持つ表現)15語<sup>3</sup>の性質について考察した。その結果、考察した語は「情態副詞(様態副詞)」と「陳述副詞」の両方の性質を持ちつつ、語によってその一方の性質をより強く持つという連続的な性質を持っていることが明らかになった。さらに、筆者は15語の性質をさらに詳しく検討する前提として、5つのグループに下位分類を行った。下位分類した各グループは必ずしも明確(非連続的)なものではなく、副詞の中での位置づけが連続的であるのと同様に、何らかの関連性を持ちながら、連続的につながっていることを指摘した。つまり、互いに直接的には関連性を持っていない語同士でも他の語と何らかの関連性を持ちながら、連続的につながっているということである<sup>4</sup>。そういう面で、本稿の考察は各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにすることによって、各グループが何らかの関連性を持ちながら連続的につながっていることを確認することにつながる。

さて、外国人が日本語を(外国語として)学習する際に、様々な難題にぶつかる。文字や発音、

文法の学習などいろいろ考えられるが、現代日本語の意味を理解することも重要な課題であると考えられる。

一例をあげると、現代日本語の中には数多くの類義語が存在する。その使い分けの学習も重要な課題であると言えよう。しかし、多くの学習者は類義語の使い分けに大変苦労しているように見える。

近年、類義語の分析を行った質の良い辞書や辞典が数多く出版されるようになった。しかし、今の研究が必ずしも十分とは言えない。特に、類義語分析を扱った文献の中で日本語教育現場で有効に活用できるようなものはいまだ少ないと言えよう。これは海外における日本語教育においても例外ではない。例えば、正規教育機関における日本語学習者の数が一番多いと言われている韓国では、実際の教育現場で類義語の使い分けなどの教育がほとんど行われていない。様々な要因が考えられるが、上にも指摘したように日本語教育現場で有効に活用できるようなものが少ないのもその一つであると思われる。以上のように、本研究は日本語教育現場（類義語の使い分け教育）においても役立つものと考えられる。

以下、本稿の構成について簡単に述べる。

まず2. では、先行研究を取り上げ、その問題点を指摘する。次に、3. では「うっかり(と)」を「うかうか(と)、うかつに、うかつにも」の3語と対比し、意味分析を行う。それぞれの組み合わせは相対的に意味が近いと考えられるものである。それぞれの対比から、各語の持つ個別の意味とその類似点・相違点が明らかになる。4. は本稿のまとめである。

## 2. 先行研究と問題点

### 2.1. 「うっかり(と)」

「うっかり(と)」については、上に上げたすべての先行研究で取り上げられており、意味記述もおおむね一致している。以下、比較的詳細な記述がなされていると思われる国広他(1982)と酒井(1998)を取り上げる。

国広他(1982:198)：注意力の不足による意図しないで行う行為の場合に用いられる。

酒井(1998:98)：動作主体の行為が不注意なもので、話し手によって、その行為が適当でないものと見られ、マイナス価値づけをあたえられるようすをあらわす。

「うっかり(と)」については、本稿においても、先行研究と基本的に同じ立場に立って考察していく。但し、先行研究では「意図、注意」など、各語の意味特徴を説明するのに重要であると思われる用語の説明(定義)についてはまったく触れられていない。

以下では、各語の意味特徴を記述するのに重要であると考えられる用語(概念)についての説明を試みた上で(1.1.ですでに述べているが)、主に実例に基づき、さらに詳しく検討する。

### 2.2. 「うかうか(と)」と「うかつに」と「うかつにも」

「うかうか(と)」と「うかつに」と「うかつにも」の意味を記述した先行研究としては酒井(1998)がある。以下は酒井(1998:97-102)が各語の意味特徴について記述したものである。

「うかうか(と)」：動作主体の行為や状態が、相手に気をゆるし用心深さを欠いたもので、話し手によって、その行為や状態が、不注意で適当でないものと見られ、マイナス価値づけをあたえられるようすをあらわす。

「うかつに」：動作主体の行為が不注意、無警戒なもので、話し手によって、その行為が適当でないとしてマイナス価値づけをあたえられるようすをあらわす。

「うかつにも」：すでに起きた出来事が十分な考慮なく適当でなかったと話し手がマイナスの価値づけをあたえることをあらわす。

問題点として、まず、「うかうか(と)」には、酒井(1998)の意味記述では説明できない場合があると考えられる。例えば、次の例(3)がそれである。

(3) そうだね。も少し早く打ちあけて君に助けてもらうべきだった。しかしまさか、急にこうも重くなろうとは思わなかったので、うかうかと日を送ってしまった。

(田辺聖子『新源氏物語』：2285)

これは、概略「適当な措置もとらずに、のんきに日を送ってしまった」というようにとらえることができる。つまり、この場合は、「相手に気をゆるす」といったものが考えられないということである<sup>5</sup>。そこで、本稿では多義語という観点からそれぞれの意味を分析し直すことにする。

多義語については、国広(1982：97)の『『多義語』(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う』という定義に従う。

また、「うかうか(と)」の複数の意味関係を明確にするために、Langacker(1987, 1988a, 1988b)が提案しているネットワーク・モデル(network model)を取り上げる。なお、このネットワークモデルについては、靱山(2000)で詳しく整理・検討されており、本稿においても基本的にこの記述に基づいて、考察していく。

まず、ネットワーク・モデルでは、ネットワークにおける各々の節点(node)が語の確立した意味を表し、節点は、「スキーマ関係」(schematicity/実線の矢印によって示される)<sup>6</sup>と「拡張関係」(extension/破線の矢印によって示される)<sup>7</sup>という2つの基本的なタイプの「カテゴリー化関係」(categorizing relationships)によって関連づけられる。

スキーマ関係は、[A]、[B]をそれぞれ多義語の確立した意味とした場合、[[A]→[B]]と表示され、この表示は、[A]が[B]に対してスキーマ的であり、[B]は[A]の詳細化されたもの(elaboration)あるいは具体化されたもの(instantiation)であることを表す。つまり、[B]は[A]と矛盾しないが、[B]の意味記述は[A]の意味記述よりも詳細であることになる。従って、この関係は意味上の「特殊化」(specialization)あるいはその逆の「抽象化」(abstraction)の関係である。(中略)

一方、拡張関係は[[A]--->[B]]と表示されるが、拡張された意味[B]に達するには、(基本的)意味[A]のある意味特徴が保留あるいは変更されねばならない。つまり、拡張関係は意味における何らかの不一致を含むことになる。(中略)つまり、[A]と[B]という2つの意味が部分的に食い違う面があるということは、2つの意味がまったく共通点がないのでもなく、まったく同一でもないということであり、つまりは「類似」しているということである。

(靱山(2000:178-179))

拡張関係が生じるのは、話し手が、(局所的)プロトタイプの意味<sup>8</sup>と拡張された意味との間に、何らかの類似性(similarity)を認めるからである。この類似性を認めるということは、プロトタイプの意味と拡張された意味との間に共通性があることを示しており、従って、図1のように、その共通性が2つの意味に対するスキーマを構成していることになる。

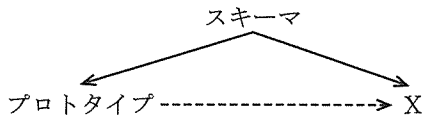


図1

(靱山(2000:180))

本稿では、以上のようなLangackerの提案しているネットワーク・モデルを参考にし、「うかうか(と)」の複数の意味関係を明確にする。

次の問題点として、「うかつに」に関する意味記述は2.1.で示した「うっかり(と)」の意味記述と非常に類似しており、相互の意味の類似点・相違点がわかりにくいことがうかがわれる。

また、「うかつにも」についての意味記述にも問題があると考えられる。酒井(1998)は「うかつにも」について、「すでに起きた出来事」について用いられるとしている。しかし、次の例(4)も「すでに起きた出来事」を表しているが、「うかつにも」を用いることができない。

(4) \*うかつにも先日太郎の家に泥棒が入ってしまった。

このことから、「うかつにも」は「すでに起きた出来事」であっても、例(5)のように「話し手とかかわる出来事」でないと用いることができないと考えられる。本稿では、以上を踏まえ、「うかつにも」についてより適切な意味記述を試みる。

(5) 私は原作しかまだ読んでません、しかも高校生の頃だったので、今パラパラとめくって記憶の彼方をたぐっています。たしかに、この文章、岡野玲子に似合うかもしれないなと納得しながら、岡野氏がサイベルの漫画を出しているなんて、うかつにも知りませんでした。

(<http://www.pat.hi-ho.ne.jp/maaz/library/book-log4.htm>)

さらに、酒井(1998)では各語の意味の類似点・相違点についてはまったく説明がされていない。そこで本稿では、各語の個別の意味記述に加え、相互の意味の類似点・相違点についても詳しく見ていくことにする。

### 3. 「うっかり(と)」と「うかうか(と)、うかつに、うかつにも」

本節では、「うっかり(と)」を、「うかうか(と)、うかつに、うかつにも」の3語と比較し、それぞれの個別の意味とその類似点・相違点を検討する。

#### 3.1. 「うっかり(と)」と「うかうか(と)」

ここでは、「うっかり(と)」を「うかうか(と)」と対比し、相互の意味の類似点・相違点を検討する。

まず、「うっかり(と)」を取り上げる。以下の例を見てみよう。

(6) その直後、東京・神田で起きた強盗殺人事件で、犯行現場に遺留された指紋から強盗の前歴者の犯人が割り出されたため、指紋への評価が急速に高まった。翌月からは管内各署で取り扱った被疑者の指紋を登録するためのカードが作成されることとなり、次第に全国へもこのシステムが広がっていった。大正末期から四年間にわたって首都圏を震かんさせた妻木松吉による「説教強盗事件」も、解決のきっかけは「指紋は残さない」と言い張っていた妻木がうっかり消し忘れた六つの指紋だった。

(毎日新聞, 91.1.17朝刊)

(7) 十九日、東海道新幹線の広島発東京行き「ひかり70号」が停車するはずの三島駅を通過。同駅で降りる予定の乗客は、隣の熱海駅まで遠回りするはめに。新幹線はコンピューター制御。停車駅を間違えることはない。だがこの日は豪雨でダイヤが混乱。東京の総合指令室は手動で制御していたが、係員がうっかり「通過」の指令を出した。

(毎日新聞, 91.9.20朝刊)

(8) 五月二十三日の抽選後、平井被告は知り合いの女性(35)と二人で「一千万円以上当たったら折半しよう」と当たり券を新聞でチェック。七百枚のうち三百枚は女性がうっかり捨て、残る四百枚の賞金は二等の組違い賞(五万円)を最高に計六万三千二百円だった。

(毎日新聞, 91.5.22朝刊)

国広他(1982:198)は「うっかり(と)」は「注意力の不足が原因の場合に用いられる」と説明している。実際、上の例でも「うっかり(と)」は<注意力の不足>を表している。例えば、例(6)の場合「今まで、犯罪をおかす時には、必ず指紋を残さないようにしていたが、その日に限って疲れていたりして、十分な注意をはらわなかったために、指紋を残してしまい、逮捕されてしまった」というように読みとることができる。また、例(7)は「手動制御を行う際の係員の不注意が原因で、停車すべき駅であるのに通過の指令を出した」というようにとらえることができる。例(8)の場合は「女性がぼんやりしてたりして、ちゃんと気をつけなかったために、当たり券三百枚を捨てた」と言える。

さらに、上の例からは、「うっかり」行う行為は「好ましくない行為である」という含意も読みとれる。そこで、「うっかり(と)」の意味は、<主体が><注意力の欠如が原因となって><好ましくない行為をする様子を表す>と記述できる。

次に、「うかうか(と)」についての例を見てみよう。

(9) 『私は絶対嘘は言っていない。私の言うことは事実なんだ。信じてくれ。』と叫ぶ人をうかうか信じてはならないのではないか。

(<http://www.tmsystems.co.jp/dia/980210.html>)

(10) ところが突如舞い込んできた転職の進め(ママ)に、うかうかと乗ったのが失敗の元だっ

た。

([http://ad.nikkeibp.co.jp/NMM/jinbo/vol4/vol4\\_17.html](http://ad.nikkeibp.co.jp/NMM/jinbo/vol4/vol4_17.html))

- (11) オマエ、普通の布団を「これは最高の品質のものですから」って三十万ぐらいで売りつけられてもうかうかと買ってしまうタイプだろう。

(<http://j-mac.netjoy.ne.jp/m-pot/diary/tokidoki99-03.html>)

酒井(1998)は「うかうか(と)」における主体の行為は「相手に気をゆるし行う行為である」と指摘している。上の例における「信じる」、「(転職の勧めに)乗る」、「買う」という行為も、「相手の言動に十分な注意をはらわずに行う行為」として考えられる場合である。例えば、例(9)の場合『私の言うことは事実なんだ』と叫ぶ人に対して、気を許して、注意深く考えずに信じてはならない」ということになる。また、例(10)の場合は「相手(転職を勧められた会社)の(今よりもっと条件がいいなどの)甘い言葉に気を許し、十分考慮せず転職の勧めに乗ったのが失敗の元だった」ととらえられる。さらに、例(11)の場合「普通の布団なのに、相手(販売員)から『これは最高の品質のものですから』などと言われると、気を許してしまい、十分考えずに買ってしまう」というように読みとることができる。

以上のことから、「うかうか(と)」の意味は<主体が><相手に対する><注意力の欠如が原因となって><好ましくない行為をする様子を表す>と記述できる。

ところが、「うかうか(と)」には今記述した意味と異なる意味に用いられることがある。例えば、次の例では『相手に対する』注意力」といったものが考えられない。

- (12) そうだね。もう少し早く打ちあけて君に助けてもらうべきだった。しかしまさか、急にこうも重くならうとは思わなかったので、うかうかと日を送ってしまった。

(例(3)を再掲)

- (13) わたくしも、既に72才と10か月、約26600日と出会い別れてきました。二度とない大事な一生をうかうかと過ごしてしまった深い悔恨が、わたしの脳裏に焼きついています。

(<http://www.habi.ne.jp/nkj/nkj/h7-12-84.html>)

- (14) 私は遺して置かなければならぬ何物をも持つてゐないと信じてゐる。そしてそれは一番己を知った言葉だと思つてゐる。私は別に豪(えら)い人間でも、感心な人物でもない。人は別に私の生ひたちやその履歴を必要としないであらう。だからこそ私は氣安くその日その日を送つてゐられるのだ。けれども、それは決して私がうかうかとのんきに日を暮してゐるといふ意味ではない。私とても生きてゐる以上は、何かこの世もしくは人々の上に役に立つことをしたいと思ふ。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/mizuno/htmlfiles/kagayakeru.html>)

上の例はいずれも、望ましく思われる行動、しかるべき行動をとらずに「日を送る、一生を過ごす、日を暮らす」ということである。例えば、例(12)の場合「ちゃんと適切な措置をとっておくべきだったが、そうせずにのんきに日を送ってしまった」ということになる。また、例(13)の場合は「一生をぼんやりと、やりがいのない人生を過ごしてしまった」ということになる。さらに、例(14)の場合は『私は氣安くその日その日を送っている』というのは、私が決して、何



の考えもなく、のんきに日を暮らしているという意味ではない」というように読みとることができる。つまりここでは、「うかうか(と)」は「日を送る」、「一生を過ごす」、「日を暮らす」などのように、相手のかかわらない、具体的な行為内容が特定されない表現と共起して<主体が><(しっかりした考えもなく)何の有意義な行動もとらないでいる様子を表す>という意味で用いられている。この場合の「うかうか(と)」の意味は、最初に記述した意味、つまり<主体が><相手に対する><注意力の欠如が原因となって><好ましくない行為をする様子を表す>という意味からの拡張であると考えられる<sup>9</sup>。<主体が><相手に対する><注意力の欠如が原因となって><好ましくない行為をする様子を表す>という意味と、<主体が><(しっかりした考えもなく)何の有意義な行動もとらないでいる様子を表す>という意味との間には、<ある事柄や事態に対して十分な考慮をしない主体の好ましくない状態>というスキーマを抽出することができる。このことを図で示すと次のようになる。

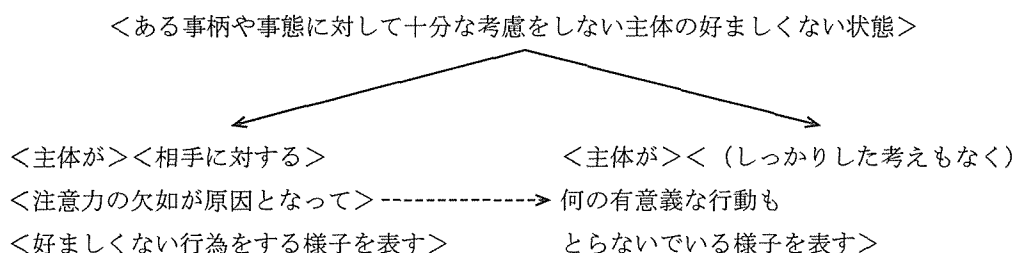


図 2

今度は、「うっかり(と)」と「うかうか(と)」の意味の類似点・相違点を検討する<sup>10</sup>。先に見たように、「うっかり(と)」は「注意力の欠如」による行為の場合に用いられる。同様に、「うかうか(と)」も「注意力の欠如」による行為の場合に用いられる。そこで、次の例のように「うっかり」を「うかうか(と)」に置き換えられる場合もある。

- (15) 被害に合わないために、国民生活センターは「きっぱり断る。あいまいな返事をしない。長電話にならないようにする」とアドバイスする。うっかり (うかうか(と)) 契約に応じたしまった場合、東京都消費者センターは、内容証明で契約破棄を通告する文書を業者に送付することを勧めていると言う。

(毎日新聞, 93.4.23夕刊)

さて、酒井(1998:99)は(16)を例にあげて、「うかうか(と)」は「相手に対する気持ちのゆるみを表すことから、相手のない動作には使われない」と指摘している。

- (16) \*うかうかと茶碗をわってしまった。(酒井(1998:99)) (下線は引用者)

「うっかり(と)」と「うかうか(と)」の相違点を酒井(1998)の記述で説明できるのではないかと考えられる。以下の例は「うっかり(と)」を「うかうか(と)」で言い換えることができない。

- (17) うっかり (\*うかうか) コンピュータをこわしてしまった。

- (18) アパートに近くなりタクシー代を片手に、カギをもう片手につかみ降りる準備をしました。いざ降りる時うっかりと (\*うかうかと) タクシー代ではなくカギを運転手さんに渡

してしまいました。

(毎日新聞, 96.5.5夕刊)

まず、例 (17) の場合、「コンピュータをこわす」という行為は「説明書などを注意深く読まない」などという自分の「注意力の欠如」が原因の行為であると言える。そこで、この場合、「うかうか(と)」が用いられないのは「相手に対する注意力の欠如」といったものが考えられないからである。また、例 (18) の場合、「タクシー代ではなくカギを渡す」という行為は「ぼんやりと他のことを考える」などという「自分の注意力の欠如」が原因の行為である。この場合も、「うかうか(と)」が用いられないのは、「タクシー代ではなくカギを渡す」という行為は「相手(運転手)に対する注意力の欠如」によるものとは考えられないからである。

### 3.2. 「うっかり(と)」と「うかつに」

続いて、ここでは、「うっかり(と)」を「うかつに」と対比し、相互の意味の類似点・相違点を検討する。「うかつに」も「うっかり(と)」と同様に、「注意力の欠如」による好ましくない行為に関して用いられる。そこで、次の例のように「うかつに」を「うっかり」に置き換えられる場合もある。

- (19) コノハガエルによく似ていますが、全く違います。口の脇にはトゲが隠れていて、触ると皮膚を通して外に出てきます。かなり尖っているのでうかつに (うっかり) 掴むと手に刺さります。

(<http://www.hkr.ne.jp/rieokun/exfrog/aka/cerato/soromon.htm>)

しかし、「うかつに」は「うっかり(と)」と違う意味の側面も持つ。次の例の「うかつに」を「うっかり」で言い換えてみると、この文脈では、不可能かやや不自然な文になる。

- (20) あ、あと、レモンが添えてあるんだけど鉄板の上の上のうかつに (? うっかり) つかむと熱いです、注意。

(<http://www.itojun.org/esd/19990424/>)

- (21) これを2機で追いかける。やや上昇しながらの追尾なのでしばらくただ時間が流れる。cool氏が敵機種を確認。B17である。こいつにはうかつに (?? うっかり) 近づくと返り討ちにあう可能性が高い。左右にわかれB17を囲む。真後ろからの攻撃は危険なので斜め後方から攻撃を開始した。

(<http://niigata.cool.ne.jp/peran/wb/taku666.html>)

- (22) ターザンは、ご存じのとおりエドガー＝バウロズの原作で、著作権は彼とか映画会社が持っています。無神経にターザンを登場させていた日本の漫画家も、うかつに (\*うっかり) この密林の王者の代名詞を使えなくなりました。

(<http://www.tezuka.co.jp/Japanese/metrotown/bookcenter/manga/list/si06/z01.html>)

上の例 (20)～(22) における「うかつに」は「注意せずに」、「気をつけずに」といった意味に近いと考えられる。例えば、例 (20) の場合は「料理が熱い鉄板の上の上のうかつに」で、「容器などをつかむ時には、十分注意してください」というように読みとることができる。また、例

(21) は「B17を攻撃する時には、左右にわかれ囲み、斜め後方から攻撃をするなど、十分気をつけなければならない。そうしないと、返り討ちにあう可能性が高いからである」ということになる。さらに、例(21)の場合「これから『ターザン』という用語を使う時には、著作権のことを考えるなどの十分な注意をはらわなければならない」というようにとらえられる。

以上のことから、「うかつに」の意味は、〈主体が〉〈自分の行為に対して〉〈注意深いところがない様子を表す〉と記述できる。

ところで、上の例(20)～(22)は「うかつに」を「うっかり」で置き換えてみると、不可能かやや不自然な文になると指摘した。これは、「うかつに」の場合の主体は「自分の行う行為の仕方に注目し、その行為の行い方に注意深いところがない、気をつけるところがない」ととらえているのに対して、「うっかり」の場合の主体は「自分の行為を、注意力の欠如が原因となってその結果行う行為」としてとらえていると考えられるからである。例えば、例(21)の場合は、上でも説明したように、「B17に近づく時には、十分気をつけて近づいてください(つまり、近づき方に気をつけなさい)」と言える。この場合、「B17」に近づく時の留意点が明記されているのに、「うかつに」の代わりに「うっかり」を用いると、「注意せずに近づく」と返り討ちにあう。だから、近づかない方がいい」という意味になってしまう。従って、「うっかり(と)」を用いるとこの文脈に合わなくなる。また、例(22)の場合、「うっかり」が用いられないのは、この場合の「使う」という行為が「注意力の欠如が原因となって、その結果行う行為」ではなく、「使う時に、十分注意しなければならない」という「行為の仕方に注目している」と考えられるからである。

今度は逆に、「うっかり」を「うかつに」で言い換えることができない例を見てみよう。

(23) うっかり (\*うかつに) コンピュータをこわし、父に怒られてしまった。

(24) うっかり (\*うかつに) 火を止めるのを忘れて真っ黒コゲにってしまった鍋。

(毎日新聞, 92.12.16朝刊)

以上の例において、「うかつに」が用いられないのは、この場合の「コンピュータをこわす」、「忘れる」という行為は「主体の注意力の欠如が原因となって、その結果行う行為である」と言えるからである。つまり、「コンピュータをこわす」、「忘れる」という行為を行う際に、「注意深いところがない、気をつけるところがない」ということが考えられない(「注意深くこわす、注意深く忘れる」ということがあり得ない)。従って、「うかつに」は用いられない。

ここで、例(19)をもう一度取り上げる。

(25) コノハガエルによく似ていますが、全く違います。口の脇にはトゲが隠れていて、触ると皮膚を通して外に出てきます。かなり尖っているのでうかつに(うっかり) 掴むと手に刺さります。

(例(19)を再掲)

上の例は「うかつに」を「うっかり」で言い換えられるが、意味は違う。「うかつに」を用いた場合は「このカエルを掴む時には、十分な注意をはらわないと刺さる危険性がある。だから、もし、掴む時は、その掴み方に十分気をつけよう」というようにとらえることができる。これに対

して、「うっかり」を用いた場合は「このカエルはトゲを持っているから、普通のカエルと同じだと思って、注意せずに掴んだりすると手に刺さる。だから、掴まないようにしましょう」というように読みとることができる。

ここで、「うっかり(と)」と「うかつに」の意味の相違点をもう一度整理しておく。「うっかり(と)」は「注意力の欠如が原因となってその結果行う行為である」ことを表す場合に用いられるのに対して、「うかつに」は「行為の仕方に注目し、その様子に注意深いところがない、気をつけるところがない」ことを表す場合に用いられる。

### 3.3. 「うっかり(と)」と「うかつにも」

本節では、「うっかり(と)」を「うかつにも」と比較し、相互の意味の類似点・相違点を検討する。「うかつにも」も「うっかり(と)」と同様に、「注意力の欠如」による好ましくない行為に関して用いられる。そこで、以下の例は「うっかり」を「うかつにも」で、「うかつにも」を「うっかり」でそれぞれ言い換えられる。

(26) 途中退席した委員の一人が大蔵省の内部資料をうっかり (うかつにも) 持って帰ってしまった。

(毎日新聞, 96.7.8朝刊)

(27) 三堀はうかつにも (うっかり), 自分の給料袋と盗んだ給料袋をとりちがえてしまったのである。

(三浦綾子『塩狩峠』: 491)

(28) きのう、やっとタコメータの電球を交換したのですが、迂闊にも (うっかり), スピードメータワイヤの取り付け部分のプラスチックを折ってしまいました。

(<http://citroen.chem.nagoya-u.ac.jp/htdocs/19980127/8160.html>)

しかし、「うかつにも」は「うっかり(と)」と違う意味の側面も持つ。次の例では、「うかつにも」を「うっかり」で言い換えられない。

(29) チッ化ナトリウム  $\text{N}_3\text{Na}$  は、防腐剤として使いますから私達の研究室にもあります。細菌に対して毒なのですからヒトにも毒性があるのは考えてみれば当たり前のことです。しかし、ヒトを傷つけるためにも使えるとは、うかつにも (\*うっかり) 知りませんでした。

(<http://tag.ahs.kitasato-u.ac.jp/tag-wada/noframe/1106.htm>)

(30) 植物園がタダは知っていたが、うかつにも (\*うっかり) 映画館にシルバー割引があるのは知らなかった。

(<http://www.adp.ne.jp/senior/essyl.html>)

(31) 「51人が市外へ転校」。先日、こんな見出しの記事が大牟田地区をエリアとする本紙・ありあけ版に載った。内容は、三井三池鉱閉山に伴う離職者の再就職などで大牟田市から市外に転校した小、中学生の数がこの一年間で五十一人に上ったというもの。閉山のしわ寄せが、こんな形で子供の世界に及んでいるとは、うかつにも (\*うっかり) その時まで全く気づかなかった。

(<http://www.nishinippon.co.jp/media/news/9806/0626d.html>)

上の例 (29)～(31) における「ヒトを傷つけるためにも使えるとは知りませんでした」、「シルバー割引があるのは知らなかった」、「その時まで全く気づかなかった」というのは、話し手の十分な注意があつたら、「知ることができた」(例 (29), 例 (30)), 「気づくことができた」(例 (31)) ということになる。また、話し手は「知りませんでした」、「知らなかった」、「気づかなかった」ことに対して、反省の意を表していると考えられる。例えば、例 (29) の場合「日頃、『チツ化ナトリウム N3Na』の用途について注意深く観察していたら、ヒトを傷つけるのにも使われるということを知ることができたのだが、そうできなかったので残念だ」というようにとらえられる。また、例 (30) の場合は、「前もって、映画館の情報についてちゃんと調べていたら、映画館にシルバー割引があるのを知ることができたと思う。ちゃんと調べてみるべきだった」ということになる。さらに例 (31) の場合は「閉山による問題がこんなに大きくなるとは思わなかった。早くからいろいろと対策を考えるべきだった」というように読みとることができる。

以上のことから、「うかつにも」の意味は、〈話し手が〉<sup>11</sup>〈自分とかかわるある事柄に対して〉〈十分な注意をはらわなかったという〉〈反省の意を表す〉と記述できる。

ところで、上の例 (29)～(31) は、「うかつにも」を「うっかり」で言い換えることができないと指摘した。これは「知りませんでした」、「知らなかった」、「気づかなかった」というのは、話し手が「ある事柄に対する十分な注意をはらわなかった」結果に対する「反省の意を表している」のであって、単に「注意力の欠如による行為」とは考えられないからである。

続いて、「うっかり」を「うかつにも」で言い換えることができない例を見てみよう。

(32) 備えのない身体を強風の中にうっかり (\*うかつにも) さらけ出せば吹き飛ばされることは間違いなかった。

(新田次郎『孤高の人』: 1044)

(33) 閣僚に波及することまで考えると、うっかり (\*うかつにも) 内閣改造も構想できない。  
(毎日新聞, 92.8.30朝刊)

以上の例において、「うっかり」を「うかつにも」に置き換えられないのは、「うかつにも」は〈話し手が〉〈自分とかかわるある事柄に対して〉〈十分な注意をはらわなかったという〉〈反省の意を表す〉場合に用いられることから、すでに起きた事柄についてしか用いられないからである。

#### 4. まとめ

以上、本稿では非意図的であることを表す副詞 (的機能を持つ表現) 「うっかり(と), うかうか(と), うかつに, うかつにも」の4語の個別の意味とその類似点・相違点を考察した。以下、分析結果を簡単にまとめておく。

まず、「うっかり(と)」と「うかうか(と)」の意味については先行研究を踏まえ、以下のように示した。但し、「うかうか(と)」に関しては、先行研究の意味記述では説明ができない場合があることを指摘し、多義語の観点から分析し直し、相互の意味関係を明らかにした。

「うっかり(と)」：〈主体が〉〈注意力の欠如が原因となって〉〈好ましくない行為をする様子を表す〉。

「うかうか(と)」：(1) 〈主体が〉〈相手に対する〉〈注意力の欠如が原因となって〉〈好ましくない行為をする様子を表す〉。(2) 〈主体が〉〈(しっかりした考えもなく) 何の有意義な行動もとらないでいる様子を表す〉。(2)の意味は、(1)の意味からの拡張である。

「うっかり(と)」と「うかうか(と)」の意味の類似点・相違点については次のようにまとめられる。

「うっかり(と)」と「うかうか(と)」は、ともに主体の行為が〈注意力の欠如によるもの〉である場合に用いられる。但し、「うかうか(と)」は、〈相手に対する注意力の欠如〉の場合に用いられるが、「うっかり(と)」は単なる〈自分自身の注意力の欠如〉の場合に用いられる。

また、「うかうか(と)」は〈相手に対する注意力の欠如〉の場合に用いられることに加えて、「日を送る」、「暮らす」、「時間を過ごす」などのように具体的な行為内容が特定されない表現と共起して〈主体が〉〈(しっかりした考えもなく) 何の有意義な行動もとらないでいる様子を表す〉場合に用いられることがある。この場合には「うっかり(と)」は用いられない。

次に、本稿では「うかつに」と「うかつにも」について先行研究における意味記述が不十分であることを指摘し、両語の意味を以下のように分析し直した。

「うかつに」：〈主体が〉〈自分の行為に対して〉〈注意深いところがない様子を表す〉。

「うかつにも」：〈話し手が〉〈自分とかかわるある事柄に対して〉〈十分な注意をはらわなかったという〉〈反省の意を表す〉。

また、「うっかり(と)」との意味の相違点については、次のような考察結果が導かれた。

まず、「うっかり(と)」は「注意力の欠如が原因となってその結果行う行為である」ことを表す場合に用いられるのに対して、「うかつに」は「行為の仕方に注目し、その様子に注意深いところがない、気をつけるところがない」ことを表す場合に用いられる。

次に、「うっかり(と)」は、単に「注意力の欠如による行為を表す」場合に用いられるのに対して、「うかつにも」は、話し手が「自分とかかわるある事柄に対する十分な注意をはらわなかった」結果に対する「反省の意を表す」場合に用いられる。従って、「うかつにも」はすでに起きた(実現した)事柄についてしか用いられない。

#### 参考文献

- 李 澤熊 (2000) 「主体の意図に関わる副詞 (的機能を持つ表現) について—非意図的であることを表す語を中心に—」, 『名古屋大学日本語・日本文化論集』第8号, pp.43-73, 名古屋大学留学生センター
- 河上 誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』, 研究社出版
- 金水 敏 (1989) 「報告についての覚書」, 仁田義雄・益岡隆志編 『日本語のモダリティ』, pp.121-129, くろしお出版
- 国広 哲弥 (1982) 『意味論の方法』, 大修館書店

- 国広 哲弥・柴田 武・長嶋 善郎・山田 進・浅野 百合子 (1982) 「ウツカリ, ツイ, オモワズ」, 『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』, pp.195-202, 平凡社
- 酒井 悠美 (1998) 「無自覚の行為であることをあらわす副詞」, 『国文学 解釈と鑑賞』, 第63巻1号, pp. 94-103, 至文堂
- 田中 聡子 (1999) 『視覚動詞の意味論』, 名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻博士論文
- 野田 尚史 (1991) 『はじめての人の日本語文法』, くろしお出版
- 芳賀 綏・佐々木瑞枝・門倉正美 (1996) 『あいまい語辞典』, 東京堂出版
- 飛田 良文・浅田 秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版
- 藤原 与一・磯貝 英夫・室山 敏昭編 (1985) 『表現類語辞典』, 東京堂出版
- 靱山 洋介 (2000) 「名詞『もの』の多義構造—ネットワーク・モデルによる分析」, 山田 進・菊地 康人・靱山洋介編『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』, pp.177-191, ひつじ書房
- 渡辺 実 (1983) 「副用言総論」, 『日本語学』, vol.2-10, pp.4-9, 明治書院
- Langacker, R.W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* Vol.1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R.W. (1988a) “A View of Linguistic Semantics.” In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*. pp.49-90. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R.W. (1988b) “A Usage-Based Model.” In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*. pp.127-161. Amsterdam: John Benjamins.

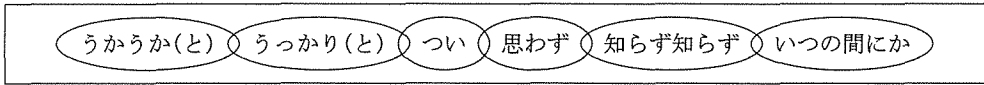
#### 例文出典

- (1) インターネット上公開されているホームページ (検索エンジンは「goo」と「青空文庫検索ページ」を使用, 検索期間は, 全て1999年7月~9月である)。  
 goo : <http://www.goo.ne.jp>  
 青空文庫検索ページ : <http://www.jca.apc.org/~earthian/aozora/lsearch.html>
- (2) CD-ROM版『毎日新聞 ('91-'96)』。
- (3) CD-ROM版『新潮文庫の100冊』(1995)。

#### 注

- 1 現在刊行されているいくつかの辞書を調べてみると、「うかつに(も)」は「うかつ(迂闊)」が見出し語として載せられている。つまり, 見出し語の副詞的用法として扱われている。
- 2 「うっかり(と)」は「うっかりミス」のように「うっかり+名詞」の形で用いられる場合がある。また, 「うかつに」は「迂闊な」, 「迂闊さ」のように, ナ形容詞と派生名詞として用いられる変異形の用法がある。それ以外にも, これらの4語には, 様々な変異形の用法があるが, 各語が持つ本来の意味とは相違がないと考えられる。そこで, 本稿では, これらの4語の持つ変異形の用法については, 指摘するだけに止め, 取り上げないことにする。さらに, 本稿では「うっかり」と「うっかりと」, 「うかうか」と「うかうかと」を区別せずに論じているが, 文脈によっては「と」をつけるか否かで, 文の自然さが違って来る場合もある。しかし, ここでは「と」の有無が「うっかり」と「うかうか」の本来の意味には関与しないと考え, 同様なものとして考察していく。
- 3 うかつにも, うかつに, うかうか(と), うっかり(と), つい, 思わず, 無意識に, 知らず知らず, 我知らず, いつの間にか, いつしか, ふと(ふっと), 何気なく, さり気なく, それとなく。

4 このことを図で示すと、概略次のようにまとめられる。



「○」は各語が持っている意味領域

- 5 藤原他(1985)に「うかうか(と)」は例(3)のように用いられる場合があると指摘されている。だが、意味の記述が十分とは言えず、複数の意味の相互関係についての説明もまったくされていない。
- 6 スキーマとは「それが規定するカテゴリーのすべてのメンバーに完全に適合する抽象的な特性表示」(靱山(2000:179))を指す。
- 7 拡張とは「人間のカテゴリー認識において見られる能力の一つ。カテゴリーの基本となる成員とかなりの類似性を持つてはいるものの、相違点もみられる事例に対して、その相違点を捨象してそれを包括するような形でカテゴリーを広げてゆくこと(河上(1996:203-204))」である。
- 8 プロトタイプとは「節点(複数の意味)の中で、最も確立されていて、認知的際立ちが高く、また、最初に習得され、中立的なコンテキストで最も活性化されやすいといった特徴を有するもの」(靱山(2000:179)、括弧内は引用者)を指す。
- 9 本稿では「うかうか(と)」の<主体が><相手に対する><注意力の欠如が原因となって><好ましくない行為をする様子を表す>という意味をプロトタイプの意味(基本義)として考える。
- 10 「うっかり(と)」は「うかうか(と)」が<主体が><相手に対する><注意力の欠如が原因となって><好ましくない行為をする様子を表す>という意味(基本義)で用いられる場合に類義関係にあると考えられ、以下では「うっかり(と)」を「うかうか(と)」の基本義と比較しながら考察をすすめていく。
- 11 例(27)は、小説などでよく見られる手法で、話し手以外の人の客観的な様子を表しているように見えるが、実は話し手が文の中の登場人物(三堀)の立場に立って(登場人物の視点で)、描写していると考えられる。これについて少し補足すると、金水(1989:123)は「小説や昔話などの地の文では、誰の心理状態でも自由に描写できるのであるから、始めから人称制限というものがないのではないかと述べている。また、このような小説や昔話の地の文を「語り」と呼んでいる。つまり、例(27)の場合も「語り」の文であると考えられる。以下、本稿では、各語の意味あるいは意味特徴を記述するにあたり、話し手と動作などの主体が一致しない時、それが「語り」の文である場合には、「話し手」という用語を用いて記述していく。

(投稿受理日:2002年1月7日)

(改稿受理日:2002年3月26日)

---

李 澤熊 (LEE Tack ung イ テグン)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語言語文化専攻博士後期課程

464-8601 名古屋市千種区不老町1

leetack@lang.nagoya-u.ac.jp



**A Semantic analysis of adverbs and  
adverbial expressions of unintentionality :**  
*“Ukkari(to),” “Ukauka(to),” “Ukatsuni,” and “Ukatsunimo”*

LEE Tack ung  
Graduate Student, Nagoya University

**Keywords**

Unintentionality, Synonymous Word, Polysemic Word , Extension, Schema

**Abstract**

The purpose of this paper is to analyze and describe the similarities and differences of meanings among *ukkari (to)*, *ukauka (to)*, *ukatsuni*, and *ukatsunimo*. These adverbs and adverbial expressions have a semantic feature “unintentionality” in common. The result is as follows.

1. *Ukkari(to)* and *ukauka (to)* are both used when the subject’s action is attributable to his or her lack of attention. While it is the subject’s lack of attention to others that is relevant in the case of *ukauka(to)*, the simple lack of attention of the subject to any action is relevant in the case of *ukkari(to)*.
2. *Ukatsuni* is used when the subject lacks attention to the way of his or her own action.
3. *Ukatsunimo* is used when the speaker reflects on his or her lack of attention to things that have already happened.